

【1】摩訶波闍波提の出自（家系・両親・姉妹・子供等）

[0] まず摩訶波闍波提の家系・両親・姉妹・子供等について調査したい。釈尊の母親であるマーヤー夫人と摩訶波闍波提は姉妹であったが、その長幼関係は摩訶波闍波提が何歳頃に釈尊の養母となったのか、息子の難陀は何歳くらいの時の子供であったのか、そして何歳頃に出家したのか、ひいては比丘尼サンガがいつごろ形成されたのかを検討する材料となる。

[1] 摩訶波闍波提の出自に関する資料には次のようなものがある。

[1-1] これには A 文献資料は残されていない。要するに信頼できる資料をもってこれを検討することはできないということである。

[1-2] B 文献資料には次のようなものがある。

(1) (前世に Padumuttara 仏がゴータミーに授記して) 今から 10 万劫の後に、オッカーカ (甘蔗) 族の生れにして (Okkākakulasambhavo)、ゴータマという師主 (satthar) が世に出るのであろう。この法における相続人・嗣子であって、法の化作した者である師主の、ゴータミーという名の弟子尼 (sāvīkā) になるであろう。この者はその仏の母の姉妹 (Buddhassa mātucchā) かつ仏の生命の養育者となり、長老比丘尼の中の第一位を得るのであろう。

……それより死して有夫者として私たちは (mayam) 三十三天に行き、最後生にてはデーヴァダハ城 (Devadaha pura) に生まれた。父は釈種アンジャナ (Añjanasakka)、母はスラッカナー (Sulakkhaṇā) であった。それからカピラヴァットウの浄飯王の家 (Suddhodana-ghara) に嫁いだ。残りの者もみな釈迦族に生まれて、その同じ種族の家に嫁いだ。私は皆より優れていたもので、勝者の保有者となった。我が子 (mama putta) は家を出て仏・化導者となり、後に私は 500 人とともに出家して、釈種の勇者 (500 人の釈種の女たちを指す) とともに寂靜の樂を体得した。Apadāna 004-002-017 vs.103~118 (vol. II p.537)

(2) (比丘尼の紹介の中で) マハーパジャーパティ・ゴータミーは、1 人の母からマーヤー夫人とともに生まれた妹であって (Māyādevī ca kaniṭṭhā sahajātā ekamātukā)、あたかも慈母のごとく世尊に乳を飲ませた (bhagavantam thanam pāyesi mātā va anukampikā)、名声ある、第 1 の (agganikkhittā)、六神通あり、大神変力ある者として知られる。Dīpavaṃsa 18-7~8 (p.096)

(3) シーハッサラ王 (Sihassara rāja) の子孫である王には 8 万 2 千人があり、ジャヤセーナ (Jayasena) はその最後であった。かれらはカピラヴァットウの釈迦王 (Kapilavatthusmiṃ Sākyarājā) として知られていた。シーハハヌ (師子頰) 大王はジャヤセーナの実子であって、ジャヤセーナにはヤソーダラー (Yasodharā) という名の王女があった。デーヴァダハ城には釈氏デーヴァダハという名の王があり、アンジャナ (Añjana) とカッチャナー (Kaccānā) とはその 2 児であった。カッチャナーはシーハハヌの第 1 夫人 (mahesī) となり、ヤソーダラーはアンジャナ王の第 1 夫人となった。アンジャナ王には 2 人の王女があり、マーヤー (Māyā) とパジャーパティ (Pajāpatī) である。また 2 人の王子があり、釈氏ダンドパーニ (Daṇḍapāṇi) とスツ

パブブダ (Suppabuddha) である。シーハハヌには5人の王子と2人の王女があり、スッドーダナ (Suddhodana)、ドートーダナ (Dhotodana)、サッコーダナ (Sakkodana)、スッコーダナ (Sukkodana)、アミトーダナ (Amitodana) と、アミター (Amitā)、パミター (Pamitā) である。アミターは釈子スッパブダの第1夫人となり、バツダカッチャナー (Bhaddakaccānā) とデーヴァダッタ (Devadatta 提婆達多) の2児をもうけた。マーヤーとパジャーパティイーとは浄飯王の妃になり、我らの勝者は浄飯王とマーヤーとの子だった。大牟尼尊はこのように (始祖である) マハーサンマタの王統におけるあらゆる王族の長として生まれた。バツダカッチャナーは菩薩たるシッダッタ王子の第1夫人であって、ラーフラ (Rāhula) はその子である。ビンビスーラ (Bimbisāra) とシッダッタ王子は朋友であって、2人の父もまた朋友であった。菩薩はビンビスーラに長じること5歳であって (Bodhisatto Bimbisārā pañcavassādhiko ahu)、29歳の時に出家し (ekūnatimso vayasā bodhisatto 'bhikkhami)、6年の苦行の後に35歳にして菩提に達し (padahitvāna chabbassaṃ bodhiṃ patvā kamena ca pañcatimso va vayasā)、次第を経てビンビスーラ王に会った (1)。Mahāvamsa 2-14~27 (p.013~015)

- (1) パジャーパティイーはマーヤーと姉妹であって、二人はスッドーダナの妃となった。二人の父親はデーヴァダハ城のデーヴァダハの王子であったアンジャナであって、母親はカピラヴァットゥ城のジャヤセーナの王女であるヤソーダラーということになる。また二人にはダンダパーニとスッパブダという兄弟があった。スッパブダはスッドーダナの妹 (あるいは姉?) のアミターと結婚し、バツダカッチャナーとデーヴァダッタをもうけた。したがって釈尊とデーヴァダッタは父方・母方の両方で従弟 (あるいは従兄?) ということになる。中村元氏はこれに基づいて家系図を描いているので参照されたい。『ゴータマ・ブダ I』(決定版 中村元選集) p.772 なお、これと同じ文章が *Jinakālamāli* (p.021、未刊の畑中訳本 p.085) にも見いだされる。

(4) マハーパジャーパティイー・ゴータミーは釈尊の生まれるに先立って (satthu nibbattito puretaram eva)、デーヴァダハ城 (Devadahanagara) のマハースッパブダの家再生した (Mahāsuppabuddhassa gehe paṭisandhiṃ gaṇhi)。Gotamī というのは彼女の姓から名づけられたものである (Gotamī ti'ssā gottāgatam eva nāmaṃ ahoṣi)。彼女はマハーマーヤーの妹 (Mahāmāyāya kaniṭṭhabhaginī) であり、占相師はこの2人に宿る子は転輪聖王となるであろうと予言した。2人が年頃になった時浄飯王は彼女たち双方を祝典を催して家に連れてきた (Suddhodanamahārājā vayappattakāle dve pi maṅgalaṃ katvā attano gharaṃ abhinesi)。Therīgāthā-A. (pp.140~141)

(5) 師子頰王が劫比羅城を治めていたとき、善悟王が天示城を治めていて、王后を妙勝と云った。女が生まれたとき、これを幻化と名づけ、占相師は「今王聖女後必生兒。具足諸相有大威徳得力輪位」と予言した。またしばらくしてもう一人の女が生まれたとき、これを大幻化と名づけ、占相師は「今王聖女後必生兒。具三十二大丈夫相。威徳尊重至轉輪王位」と予言した。善悟王は師子頰王に使者を出し、「あなたの長子の浄飯に二人の女のうちの一人を嫁がせたい」と申し入れた。師子頰王は「二人とも相好を具している、二人とも浄飯の妃としたいが、二妻を取らないという先王の誓いがある二人の妃

をとれない、今しばらく小女（下の娘）の輪王を生む者を娶りたい、大女（上の娘）はしばらく嫁がせないでほしい」と答えた。そして小女は浄飯王の妃となった。その後般荼婆国の反乱を浄飯太子が指揮して鎮圧した。師子頰王は「不取二妃」の先誓を解除することを釈迦族と協議したうえ、善悟王に長女を浄飯太子の妃とすることを申し入れ、その女を太子の妃とした。そして久しからずして師子頰王は崩御し、浄飯太子が父の位を継いで王となった。後に菩薩は觀史多天から人間を觀察して、白浄王の最大夫人の胎中に誕生すべきことを觀察し、摩耶夫人の胎内に宿った。（ここでは幻化と大幻化のどちらが摩耶夫人に相当するのか判然としないが、梵本⁽¹⁾によればこの箇所もMahāmāyāで、生母についての記事はすべてMahāmāyāとなっているから、妹の大幻化がマーヤーにあたることになる）『根本有部律』「破僧事」（大正24 p.105中）

(1) Gnoli, R. ed. : *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu*, part I Roma, 1977 p.040

(6) 迦毘羅から遠くないところに天臂城があり、そこに善覚という名の一釈種豪貴長者がいて、この釈長者に8人の女が生まれた。1は意、2は無比意、3は大意、4は無辺意、5は髻意、6は黒牛、7は瘦牛、8は摩訶波闍波提（隨言大慧亦云梵天）と名づけられた。八女の梵天は年はもっとも幼少であったが、生まれたときに能相婆羅門師は「この女は嫁いで児を生めば必ず轉輪聖王となる」と占った。年漸く長成して、自国内の一釈氏にこのような女がいることを聞いた浄飯王は、「我今当索是女作妃」と思い善覚長者に使いを出したが、彼は「私には8女があります、どうして大王は最小の者を求めるのですか。しばらく待って下さい。7女を処分し終わったら、大慧を与えて妃にしましょう」と応えた。浄飯王は「7女が嫁しおわるまでは待てません。私はあなたの8人の女を皆ごとく引き取りたいと思います」と言い、善覚も王命に随った。浄飯王は8女を宮中に引き取り、長女の意と八女の大慧を妃となし、残りの6人の女を3人の弟に分け与え、それぞれ2人の女を妃とした。『仏本行集経』（大正03 p.676上）

(7) 釈迦族にはデーヴァダハという町があり、スプーティ (Subhūti) という族長が住んでいた。コーリヤ族の娘を娶り7人の女子を産んだ。マーヤー (Māyā)、マハーマーヤー (Mahāmāyā)、アティマーヤー (Atimāyā)、アナンタマーヤー (Anantamāyā)、チューリーヤー (Cūliyā)、コーリーソーバー (Kolisovā)、マハーブラジャーパティー (Mahāprajāpatī) である。釈迦王シンハハヌ (Siṃhahanu) には4人の息子と1人の娘があった。シュッドーダナ (Śuddhodana)、シュクローダナ (Śuklodana)、ダウトーダナ (Dhautodana)、アムリトーダナ (Amṛtodana) とアミター (Amitā) であった。シンハハヌが死ぬとシュッドーダナが王位を継ぎ、妃を求めてバラモンたちを使いに出した。そしてデーヴァダハの釈迦族の町のスプーティの7人の娘の中の7番目のマーヤーを見いだした⁽¹⁾。シュッドーダナは「マーヤーを第一妃に」と求めたがスプーティは「6人の姉が嫁いだ後ならば」と答えた。シュッドーダナは「7人全員を自分に任せなさい」と言って、マーヤーとマハーブラジャーパティーとを自分の宮廷に入れ、他の5人を5人の兄弟に与えた⁽²⁾。Mahāvastu (vol. I p.355、J.J.Jones 訳 vol. I p.301)

(1) 「7番目」は'sapta'とされており、序数詞ではない。したがってマーヤーが7人姉妹の末妹であるとは必ずしも明記されていないわけである。しかし文意を取ってこのように訳した。

(2) シュッドーダナの兄弟は4人 (catvāri putrā) とされているから、他の5人の兄弟というのは計算にあわない。

(8) そのとき迦毘羅国に星賀賀努王があり、浄飯王・白飯王・斛飯王・甘露飯王という4人の子があった。(浄飯王に悉達多と難陀の2子があり、白飯王に娑帝疎嚕と婆捺哩賀の2子、斛飯王に摩賀囊麼と阿儻楼駄の2子、甘露飯王に阿難陀と提婆達多の2子があった。また浄飯王には蘇鉢囉という女、白飯王には鉢怛囉摩黎という女、斛飯王には跋捺黎という女、甘露飯王には細嚕囉という女があった。)

迦毘羅国から遠くないところに天指城があり、その王は酥鉢囉没駄、王妃は龍弭禰といた。この夫婦に1女が生まれ摩耶と名づけられた。相師はこれを占って「この女は後に貴子を生み、この子は灌頂の王位を継ぐであろう」と予言した。また後時に1女が生まれ摩賀摩耶と名づけられた。相師は占って「この女の産む男子は32相を備え、金輪王になるであろう」と予言した。酥鉢囉没駄王は「星賀賀努王の浄飯太子に賢徳がある」と聞いて、「娉二女与汝為妻」と考え使者を遣わした。星賀賀努王は浄飯太子を迎えに出し、先王の立願にしたがって「当納一女以為己妻」と告げ、摩賀摩耶を妃とした。王の没後に浄飯王が即位し、その後摩賀摩耶は太子を出生し、その七日後に命終した⁽¹⁾。

『衆許摩訶帝経』(大正03 p.937下)

(1) この後に長女の摩耶に関する記述はない。

[2] 一般には釈尊の生母はマーヤーであり、その死後養育したのが摩訶波闍波提であって、マーヤーが姉、摩訶波闍波提が妹の姉妹であることは疑いがないように思われるが、ここに紹介した資料の中にはこれを疑わせるものが混じっているので、これを検討する。

上記の一般的な見方を疑わせるようなものは、以下のものである。

(5) 『根本有部律』「破僧事」は摩訶波闍波提の名を出さず、デーヴァダハの二人の娘を幻化と大幻化とする。おそらく「幻化」が‘Māyā’であり、「大幻化」は‘Mahāmāyā’であろう。そして「幻化」が姉であって、「大幻化」は妹である。そして占相師が「幻化」の産む子を「諸相を具足して力輪位を得る」と予言し、「大幻化」の産む子を「三十二大丈夫相を具して轉輪王位に至る」と予言したとされるから、「大幻化」の産む子が32相を具える釈尊をさし、「幻化」の産む子が30相を具えていたとされる難陀をさすものと考えられる。また浄飯王が最初に妻としたのは「大幻化」とされているから、釈尊を生んだのは妹の「大幻化」の方であったと考えられる。ただし後に釈尊が生れるシーンでは、その母親は摩耶夫人とされ、このうちのどちらをさしているのか判然としないが、おそらくこれは「大幻化」をさすであろう。このようにここでは妹の「大幻化」が摩訶波闍波提に相当するとすると、この妹の方が釈尊を生んだことになる。また釈尊の生母のマーヤーが「大幻化」に相当するとすると、マーヤーは妹で、摩訶波闍波提の方が姉ということになるわけである。

(8) の『衆許摩訶帝経』は菩薩の母を摩賀摩耶とするが、これは「後時に生まれた女」であるから妹である。姉は摩耶とされているが、これは「32相を備え、金輪王」となる者ではなく「灌頂の王位を継ぐ」者を生む者であるから菩薩の母ではない。

また(6) 『仏本行集経』では、天臂城の一釈種豪貴長者には、8人の娘がいて、もっとも若いのが摩訶波闍波提(隨言大慧亦云梵天)であり、能相婆羅門師は「この女は嫁いで児を

生めば必ず転輪聖王となる」と占ったとするから、釈尊の生母は摩訶波闍波提ということになる。しかしこのサンスクリットに相当する〈7〉 *Mahāvastu* は娘を7人とし、その末娘が *Māyā* とされているようであり、浄飯王はこれを妃として迎えようとしたとされている。しかしやはり上の姉たちの処置が問題となり、そこで浄飯王は *Māyā* と *Mahāprajāpatī* を妃とし、他の5人を3人（あるいは4人？）の弟たちが妃として迎えたとされている。ここでは釈尊の生母は *Māyā* とされているように思われるが、このマヤーは摩訶波闍波提の妹ということになる。

このように、『根本有部律』「破僧事」と『衆許摩訶帝経』、『仏本行集経』、*Mahāvastu* は釈尊の生母をすべて妹の方とし、生母を摩訶波闍波提とするものさえあるわけである。パーリのB文献でも摩訶波闍波提が釈尊のことを「私の子（*mama putta, me putta*）」と呼ぶことがあるが⁽¹⁾、しかしこれはもちろん修辞上のことであって、これらが釈尊を摩訶波闍波提の「実子」と考えているわけではない。

(1) *Apadāna* 004-002-017 v.117 (vol.II p.538)、*MN.-A.* (vol.V p.066)

[3] したがってまず釈尊の生母が誰であったかという点から検討を始めなければならない。しかし多くのA文献やB文献が語るように、釈尊の母親がマヤーであり、摩訶波闍波提がその養母であることは疑いようがない。

[3-1] 釈尊の生母が *Māyā* であったことを記すA文献資料には次のようなものがある。

- (1) (釈尊のことばとして) 私の父はスドーダナという王で (*Suddhodano nāma rājā*)、生みの母は *Māyā devī* で、カピラヴァットゥが王城です。 *DN.014 Mahāpadāna-s.* (大本経 vol.II p.007)
- (2) 偉大な仙人の父はスドーダナ (*Suddhodana*) という名の人でした。またブツダの母はマヤー (*Māyā*) という名の人でしたが、菩薩 (*bodhisatta*) を胎内でまもり、身がやぶれてのち、三十三天で楽しんだ。 *Theragāthā* v.534 (p.057)
- (3) 実に、多くの人々のために、マヤー (*Māyā*) がゴータマ (*Gotama*) を生んだ。病と死とにとりつかれた人々のために、幾多の苦しみを取り除いたのです。 *Therīgāthā* v.162 (p.139)
- (4) 父名真浄、母名摩耶。『増一阿含』026-006 (大正02 p.637中)
- (5) 我今応正等覚、父名浄飯王、母名謨訶摩耶、城名迦毘羅。法天訳『七仏経』 (大正01 p.150下)
- (6) 今我作釈迦文尼仏。父字闍頭檀利利王。母字摩訶摩耶。所治国名迦維羅衛。先大王名槃提。失訳『七仏父母姓字経』 (大正01 p.159下)

なお『長阿含』001「大本経」 (大正01 p.003下) は「我父名浄飯利利王種、母名大清浄妙」という。

またB文献資料には次のようなものがある。

- (1) 生母をマヤー (*Māyā*) と名づけ、父をスドーダナ (*Suddhodana*) と名づけ、彼はゴータマ (*Gotama*) となるであろう。 *Buddhavaṃsa* 02-65 (p.013)
- (2) 私の父は *Suddhodana* 王、生みの母は *Māyā devī* という。 *Buddhavaṃsa* 26-13 (p.097)

(3) (菩薩は入胎すべき母親を観察して) このマハーマーヤーという妃 (Mahāmāyā nāma devī) は私の母になるであろう。Nidānakathā (Jātaka vol. I p.049。以下は Jātaka を省略する。)

(4) 父名浄飯。母号摩耶。城名劫比羅。賢子羅怛羅。『根本有部律』「菓事」(大正 24 p.055 下)

(5) 菩薩父名白浄……菩薩母名摩耶、難陀母名瞿曇彌。『十二遊經』(大正 04 p.146 下)

[3-2] また次節の【2】「釈尊の養母としての摩訶波闍波提」に掲げた資料はすべて、摩訶波闍波提が「養母」であったことを記すわけであるから、摩訶波闍波提が「生母」ではないことは明らかである。また【2】に掲げた資料の中で、釈尊の生母をマーヤーとするものは、先の混乱している資料を除けば、資料〈8〉の『方广大莊嚴經』と〈9〉の *Lalitavistara* である。

[3-3] このように、摩訶波闍波提が「養母」であって「生母」ではないことは紛れもないことであり、生母が Māyā であったことも疑いがないであろう。ただしこの Māyā を Mahāmāyā とするものもある。先の混乱していると思われる資料の中では、「妹」で釈尊の生母にあたる者を〈5〉は「大幻化」とよび、〈8〉は「摩賀摩耶」とよび、「姉」で摩訶波闍波提に相当する者を〈5〉は「幻化」、〈8〉は「摩耶」と呼ぶから、あるいはこれが混乱を引き起こす原因となっているかも知れない。

[4] 次にマーヤーと摩訶波闍波提の長幼関係について検討する。

[4-1] この関係について語る A 文献はない。

[4-2] マーヤーが「姉」で、摩訶波闍波提が「妹」であるとする B 文献資料には次がある。

出自資料で上げたパーリ系の〈2〉はマハーパジャーパティー・ゴータミーを「1人の母からマーヤー夫人とともに生まれた妹であって (Māyādevī ca kaniṭṭhā saha-jātā ekamātukā)」とし、〈4〉も同じく「マハーマーヤーの妹 (Mahāmāyāya kaniṭṭhabhaginī)」と明言する。また〈3〉がマーヤーとパジャーパティーという順序で記すのは、マーヤーが姉ということを表すであろう。

漢訳の『修行本起經』(大正 03 p.463 上)は名前を出さないで資料には掲げていないが、白浄王は妻探しのために500人の神通力を有する者を派遣し、「一女當生三十二相大人。一女當生三十相人」という拘利族の刹帝の二女を見だし、「即便求索娉迎爲妻」とする。これも三十二相大人を生む女が先に書かれているから、これが姉を意味するものと解してよいであろう。

[4-3] マーヤーと摩訶波闍波提の長幼関係について明言する A 文献資料がないために、先のような混乱が生じたのかも知れないが、上記のように明確にマーヤーを姉とし、摩訶波闍波提を妹とする資料が存在し、『根本有部律』「破僧事」などのそれを逆転させる資料と、そのどちらを採用するかと問われれば、前者を取ると答えざるを得ない。後者は生母の名さえも誤る傾向にあるのであるから、伝承の途中に何らかの混乱が生じたと考えるほかはない。また後に述べるように、摩訶波闍波提はマーヤーよりも年齢がかなり若くないと合理的に解釈できないところが出てくるから、これは動かしがたいと考えられる。

それにしても何ゆえに、このような混乱が生じたのか不思議である。Mahāpajāpatī という Mahā がつく名前とともに、あるいは生母が亡くなってすぐに養母となったということは、生母よりも養母の方が年上でなければならないという感覚があったからであろうか。また後に考察するように、生後7日の乳児に母乳を与えるためには、養母の方も授乳が可能な状況にあった、すなわち養母にも乳児があった、そのためには養母の方が年長であった方が都合がよかった、ということかもしれない。

[5] マーヤーと摩訶波闍波提の出身地とその両親について考察する。

[5-1] A 文献にはこれについて語る資料はない。

[5-2] 出自資料のうちパーリ系の伝承では、〈1〉の *Apadāna* は父親をデーヴァダハ城の釈種 *Añjana* とし、母親を *Sulakkhaṇā* とする。〈3〉の *Mahāvamsa* は父親をデーヴァダハ城のアンジャナであるとするところは同じであるが、母親をカピラヴァットゥ城のジャヤセーナの王女であるヤソーダラー (*Yasodharā*) とするところが異なる。しかし同じパーリ系の文献であるに拘わらず、〈4〉の *Therīgāthā-A* は「デーヴァダハ城 (*Devadahanagara*) のマハースッパブッダの家 (*Mahāsuppabuddhassa geha*) に再生した」とし、*Gotamī* はその姓 (*gotta*) であるという。しかし〈3〉は父のアンジャナは「釈氏デーヴァダハという名の王の子」とするから、これはその姓をデーヴァダハとするものと解せられる。

これに対して北伝系の伝承では、〈5〉の『根本有部律』「破僧事」は父親を天示城の善悟王とし、母親を妙勝とする。〈6〉の『仏本行集経』は天臂城の一釈種豪貴長者とするのみで、名は出さない。〈7〉の *Mahāvastu* は父親をデーヴァダハの *Subhūti* とし、母親をコーリヤ族の娘とする。〈8〉の『衆許摩訶帝経』は父親を天指城の酥鉢囉没駄、母親を龍弭禰とする。

天示城・天臂城・天指城は *Devadaha* をさすであろうから、これらすべてに共通するところは、マーヤーと摩訶波闍波提の出身地はデーヴァダハとするところである。そして〈1〉〈3〉〈7〉はその種族を釈迦族としている。

父親については *Añjana* とするもの、*Mahāsuppabuddha* とするもの、善悟王とするもの、*Subhūti* とするもの、酥鉢囉没駄とするものがあるわけであるが、*Mahāsuppabuddha* と善悟と酥鉢囉没駄は一つの名から由来したものであろう。しかし *Añjana* と *Subhūti* は別の名であるが、これらがどのような関係にあるのかよく分からない。

また母親については *Sulakkhaṇā* とするもの、カピラヴァットゥ城の *Yasodharā* とするもの、妙勝とするもの、龍弭禰とするもの、あるいは単にコーリヤ族の娘とするものがある。*Yasodharā* と妙勝は一つの名を表すのであろう。『修行本起経』(大正03 p.463上)はマーヤーと摩訶波闍波提を拘利族の二女とするから、母親はコーリヤ族の出身という伝承があったのかも知れない。

なお、*Nidānakathā* (vol. I p.052) はマーヤーが「私は郷里のデーヴァダハ (*kulasantaka Devadahanagara*) に行きたい」と言って、その途中のルンピニーで釈尊を出産したとしている。これも姉妹がデーヴァダハの出身であったことを間接的に物語る。

[5-3] いずれにしてもこれらはすべて B 文献資料であり、より信頼すべき A 文献には、その出身地がデーヴァダハであったことさえも記されていない。しかし出身地については B

文献であるとはいえ、すべてがデーヴァダハとするのであるから、これは一応信頼しておいてよかろう。しかし両親の名については、詳しいことは判らないと言うしかない。

また先にも述べた通り Gotamī は生家の家系の名ではなく、嫁いだ先の浄飯の姓である Gotama の女性形ではなかろうか。

[6] 浄飯王には悉達多 (Siddhattha) と難陀 (Nanda) の二人の息子があったとされる。この外に娘があったとする資料が存するが、もしそうならこれは摩訶波闍波提の子であったことになるであろう。次にこれを検討する。

[6-1] その資料は (8) であって、その娘の名前は蘇鉢囉であったという。このほかに浄飯王の娘に言及する資料には以下のものがある。

Therī Apadāna の Nandā (Janapadakalyāṇī) の項には、「カピラヴァットウの浄飯王の娘となり (Kapilavhaye rañño Suddhodanassa dhītā)、美貌のゆえにナンダーというもっとも美しい名前が付けられた (Nandā ti me nāmaṃ sundaraṃ pavaraṃ aduṃ)。最年長の兄は三界の第一人者、真ん中 (の兄) も同様に阿羅漢で (jeṭṭho bhātā tilokaggo, majjhimo arahā tathā)、自分は母 (mātā) に「釈迦族の家に仏の妹として生まれ、難陀もいない家で何をしようというのか (Sakiyamhi kule jātā putte Buddhānujā tuvaṃ Nandena pi vinā bhūtā agāre kiṃ na acchasi)」と促されて出家した。しかし修行に身の入らなかつた自分を見て、兄なる大悲者 (mahākāruṇiko bhātā me) は自分より美しい女を化作して、実はそれが不浄なる肉体からなっていることを見せしめて、智慧を得させ阿羅漢とならしめ、禪定第一の地位において下さった (jhānaparāyanā …… etadagge ṭhapesi maṃ) (取意)」(*Apadāna* 004-003-025 p.572) としている。

ここには摩訶波闍波提の名は出てこないが、ここでの「母」はもちろん彼女をさすものと考えられる。これは AN.001-014 の「禪定者中の第一はナンダー (jhāyīnaṃ yadidaṃ Nandā)」(vol. I p.025) のナンダーがこれにあたと見ているわけであって、したがってその注釈書の AN.-A.もこの Nandā を註釈して、「マハーパジャーパティー・ゴータミーの胎中に生まれた (Mahāpajāpatī-gotamiyā kucchismiṃ paṭisandhiṃ gaṇhi)」(vol. I p.363) としている。

そしてまた *Therīgāthā* の vs. 82~86 の身体の不浄なることを説かれた釈尊の教えを聞いて安らぎに達したことを歌う Nandā も、これに相当すると見ているわけであって、このアッタカターでは Nandā を Sundarī-Nandātherī とし、「ブッダが現れたときに、釈迦族の王家に生れ (Buddhuppāde Sakyarājakule nibbatti)、Nandā と名づけられた。後に美しさのゆえに (rūpasampattiyā) Sundarī-Nandā と、あるいは Janapadakalyāṇī (国一番の美人) と知られる。世尊が一切智に到達されてカピラヴァットウに帰られたときに、難陀王子 (Nandakumāra) とラーフラ王子 (Rāhulakumāra) は出家し、浄飯大王が般涅槃したときに (Suddhodanamahārāje parinibbute) マハーパジャーパティー・ゴータミーとラーフラの母 (Rāhulamātā) は出家した。そこで彼女は、私の長兄 (jeṭṭhabhātā) は転輪王位を捨てて出家して仏となった。その息子のラーフラ王子も出家し、私の兄 (bhātā) の難陀王も、母 (mātā) のマハーパジャーパティー・ゴータミーも、姉妹 (bhagini) のラーフラの母も出家した。家にいて何をなそう、私も出家しよう、と考え、比丘尼の住処に行つて出家した

(取意)」としている (*Therīgāthā-A.* vol. I p.079)。ここでは Nandā は Sundarī-Nandā と、あるいは Janapadakalyāṇī と呼ばれていたとされ、マハーパジャーパティ・ゴータミーが母で、釈尊を長兄、難陀を兄としているわけである。

同じようなことは *Suttanipāta* の 1-11 *Kāya-vicchandānika-sutta* の註釈にも書かれているが、ここでは Nandā には、難陀上座の妹の Nandā (Nandattherassa bhaginī Nandā) と、釈迦族のケーマカ王の娘の Abhirūpa-Nandā (美貌のナンダー) と、Janapadakalyāṇī-Nandā の 3 人がいたとされている。そして Janapadakalyāṇī-Nandā は尊者難陀が阿羅漢果を得たとき (āyasmante Nande arahattaṃ patte) 望みをなくして、「私の夫も母のマハーパジャーパティも他の親族も出家した (mayhaṃ sāmiko ca mātā ca Mahāpajāpatī ca aññe ca ñātakā pabbajitā)。親族がいないのに家に住むのは苦しい」と出家した、とされている。したがってここでは Nandā と Janapadakalyāṇī-Nandā とは別人で、Nandā は難陀の妹でマハーパジャーパティの娘であるが、Janapadakalyāṇī-Nandā は難陀の妻で、マハーパジャーパティは義母ということになる (*Suttanipāta-A.* vol. II p.241、村上・及川訳 第 2 巻 p.142)。 *Nidānakathā* (vol. I p.090) や *Dhammapada-A.* (vol. I p.115) では難陀とこの Janapadakalyāṇī の結婚式は釈尊がはじめて帰郷された第 2 日目のこととして描かれており、その翌日に釈尊は難陀を無理に出家させたとしている。この難陀の出家については *Theragāthā-A.* (vol. II p.032) でも取り上げられている。そしてこの Janapadakalyāṇī は *Jātaka* 182 (vol. II p.92) にも登場する。『仏本行集経』 (大正 03 p.911 下) にも難陀の妻は登場するが、ここではその名が「孫陀利」になっている。

なお Abhirūpa-Nandā は *Apadāna* 004-004-036 (p.608) に、やはり釈迦族のケーマカの娘として登場する。

このようにパーリのアッタカターにも、摩訶波闍波提と浄飯王の間に生まれた、釈尊と難陀の妹に相当する女が登場する。この女こそが A 文献 *Therīgāthā* vs. 82~86 の作者である Nandā であるとともに、禪定第一とされる Nandā であるという解釈である。しかしアッタカターでは Nandā には混乱があって、この Nandā が Sundarī-Nandā と、Janapadakalyāṇī と呼ばれたとするものと、これらを別人とするものがあることになる。

[6-2] Sundarī-Nandā という比丘尼は、『パーリ律』の比丘尼・第 5 波羅夷の因縁譚にも、染心をもって男と愛撫しあう悪比丘尼として登場する。しかし『四分律』「(比丘尼) 波羅夷 005」 (大正 22 p.715 上)、『五分律』「(比丘尼) 波羅夷 005」 (大正 22 p.078 上) は偷羅難陀比丘尼とし、『十誦律』「(比丘尼) 波羅夷 005」 (大正 23 p.302 下) は周那難陀比丘尼、『根本有部律』「(比丘尼) 波羅夷 005」 (大正 23 p.929 上) は珠髻難陀比丘尼とする。また『パーリ律』には同時に出家した者として Sundarī-Nandā のほかに、Nandā が上げられるから、おそらくこの場面の Sundarī-Nandā は今問題にしている Nandā ではないと思われる。しかしこれが難陀の妻であった「孫陀利」や Janapadakalyāṇī に相当する可能性はないではない。

[6-3] ここまでに紹介した何人かの Nandā たちは、必ずしもそれぞれに個性があるわけではなく、むしろイメージとしては出家した当初は修行に身が入らなかったという点において共通している。だからこそ *Therīgāthā* のように 3 人を 1 人と見る見方も生じるのである

う。そういう意味では『パーリ律』の比丘尼・第5波羅夷の因縁譚に登場する Sundarī-Nandā も枠の外にあるのではない。

またまさしくそういう意味では、釈尊の弟の難陀自身も Saundarananda (馬鳴造 Saundarananda)、あるいは Sundarananda (Mahāvastu vol. I p.75、vol. II p.25、vol. III p.41)、孫陀羅難陀 (『僧祇律』「単提 048」大正 22 p.369 上) と呼ばれ、そのエピソードもこれら Nandā たちと共通するものがある。要するに難陀を含めて Nandā、Sundarī-Nandā、Janapadakaiyāṇī あるいは Abhirūpa-Nandā に関するエピソードはただ一つの源泉から生じているような感をぬぐいきれない。そもそも兄が Nanda で妹が Nandā であるというのも不自然である。

現在のところ推測に過ぎないが、これらの伝承の源泉には Therīgāthā の Nandā 長老尼の、「この身体は病におかされ、不浄にして腐っている」という釈尊の教えを奉じて、身体に対する執着を離れたという偈があるのではないであろうか。これが Nandā という名前であったがゆえに比丘の難陀と関連づけられ、偈の内容から、かつては美しさを頼んでいたというイメージが生じたのではないかと考えられる。

このように摩訶波闍波提に、難陀以外のもう1人の女の子があったという伝承はにわかには信じがたい。しかしながら現在のところはこれを否定する材料も持たないので、摩訶波闍波提と浄飯王の間には、難陀以外にもう1人の子供があったかもしれない、あったとすればそれは Nandā という名で、難陀の妹になる、ということを確認しておくに止めたい。

[7] 一般的には難陀は摩訶波闍波提の息子のはずであるが、先の混乱した資料の〈5〉『根本有部律』「破僧事」は難陀は姉の幻化の息子とするし、〈6〉『仏本行集経』は八女の摩訶波闍波提 (隨言大慧亦云梵天) を菩薩の母とするし、〈7〉 Mahāvastu も、〈8〉『衆許摩訶帝経』も釈尊は末女 (妹) の息子とするのであるから、思い掛けない伝承が存在しないとは限らない。

[7-1] そこで念のために難陀と摩訶波闍波提の母子関係を A 文献を中心に確認しておきたい。言うまでもなくこれらは難陀は摩訶波闍波提もしくは釈尊の生母の姉妹の息子であるとする。

- 〈1〉 難陀は世尊の母の姉妹の子 (mātucchāputta)。SN.021-008 (vol. II p.281)
- 〈2〉 世尊は舍衛国・祇樹給孤独園におられた。そのとき長老難陀はきれいな衣とよい鉢を持ち、自分は仏の弟で、乳母の子であると高慢になっていた。『別訳雜阿含』005 (大正 02 p.374 下)
- 〈3〉 難陀は自分のことを「仏の姨母の兒なり」と述べた。『増一阿含』018-007 (大正 02 p.591 中)
- 〈4〉 そのとき釈尊の弟で母の姉妹の子である (bhagavato bhātā mātucchāputta) ナンダが比丘たちに「戒を捨てて還俗する」と言った。Udāna 003-002 (p.021)
- 〈5〉 難陀は世尊の母の姉妹の息子 (bhagavato mātucchāputta) で端正美容であった。そして世尊より四指のみ (背が) 低いのみであったので、人々は世尊と間違えた。Vinaya 'Pācittiya 092' (vol. IV p.173)
- 〈6〉 長老難陀は佛弟姨母所生。與佛身相似有三十相短佛四指。『十誦律』「波逸提 090」

(大正 23 p.130 中)

〈7〉尊者孫陀羅難陀は釈尊の育て親の子で 30 相を備えていた。『僧祇律』「単提 089」

(大正 22 p.394 上)

〈8〉孫陀羅難陀は、世尊の乳母の大愛道の子で 30 相を供えていた。白毫相と耳相がないだけであった。人々は世尊と間違えた。『僧祇律』「単提 048」(大正 22 p.369 上)

[7-2] また難陀が長女ないしは姉の息子であったとするなら、難陀が釈尊の兄であった可能性もないではないことになるが、そういう資料は見いだせない。前項の資料〈2〉は難陀を「仏弟」としている。また先の Nandā を検討した資料の中には釈尊を長兄、難陀を兄とするものがあったことは記憶に新しい。

特にラーフラが出家するときの浄飯王の次のような嘆きのことばの中には、難陀が弟であることが明白に示されている。

(1) 浄飯王が「世尊が出家したときにも苦しかった。難陀の時もそうであった。しかしラーフラに至っては甚大である」といい、「父母の許さない子を出家させないでくれ」と頼む。Vinaya「大鍵度」(vol. I p.082)

(2) 世尊出家我有少望心、而難陀童子當爲家業、而世尊復度令出家。難陀既出家已我復有少望心。羅睺羅當爲家業、紹嗣不絶。而今世尊復度出家。父母於子多所饒益、乳養瞻視逮其成長。『四分律』「受戒鍵度」(大正 22 p.809 下)

(3) 佛昔出家尚有難陀、不能令我如今懊惱。難陀已復出家、餘情所寄唯在此子。今復出家、家國大計永爲斷絶、未能忘情何能自忍。『五分律』「受戒法」(大正 22 p.116 下)

(4) 仏出家時我心愁憂不忍不喜。難陀羅睺羅後諸子出家時、我心愁憂不忍不喜。『十誦律』「受具足戒法」(大正 23 p.152 下)

〈5〉世尊當作轉輪聖王乘空往四天下、我等亦隨世尊既出家已、我等所望悉皆不得。復次難陀當作力轉輪王、彼亦世尊度令出家。亦絶希望羅怛羅有大威德當作大王。世尊今亦令其出家、我等釋種亦絶希望。『根本有部律』「出家事」(大正 23 p.1035 上)

[7-3] 以上のように、難陀が釈尊の弟であり、彼は摩訶波闍波提の息子であったことは疑いようがない。

[8] 以上の調査の結果をまとめておく。

摩訶波闍波提はデーヴァダハに住む釈迦族の生れで、釈尊の生母であるマーヤーの妹であった。その父母の正確な名前は知られない。しかしこれらはすべて B 文献に記す記事であって、A 文献にはいかなる情報も記されていない。

後に浄飯王に嫁ぎ、姉のマーヤーが亡くなった後に、姉と浄飯王との間に生まれた釈尊を養母として育てることになった。そしてその後に、浄飯王との間に子供を設けた。釈尊の異母弟にあたる難陀である。これらは多くの A 文献に記され、資料的水準は高い。そしてこの下に Nandā なる娘が生まれたかも知れないが、これについては A 文献によっては確認できない。